

想起表現

吉田 雅昭

1 本調査の概要

本章では、2006年に宮城県気仙沼市で行われた方言面接調査の、想起(ある事態についての思い出し)及びその周辺の表現に関する調査結果について考察を行う。

想起表現の形式として、共通語では「昨日、どこに行ったっけ?」「昔、日光に行ったことがあったっけ」といった文で使用される文末詞(終助詞)の‘ヶ’が代表的なものとして挙げられる。このヶは、東日本でその使用が活発であり、中でも東北方言では、平叙文においても会話の中で多用される形式である。東北方言のヶに関しては、仙台市方言を調査した小林(2000)や、東北地方全体を取り上げた吉田(2004)などに、広い用法で使用されることが述べられている。

本調査では、想起に関しての様々な場面を設定し、その際にどのような形式を使うのかを被調査者に答えて頂いた。その答えの中ではヶも多く使用されているが、この調査はヶ形の用法そのものの考察ではない。いくつかの想起を表す文脈とそこで話される会話の内容を調査者側で設定して、被調査者に提示する。そして、提示する文の最後、文末の位置に、どのような形式を付加するのかを調べた。つまり、本調査の主な対象は、過去の事態を述べる際に現れる文末形式である。

二人による会話を場面として設定した。その相手と自分(被調査者)は、同性で小学校からずっと付き合いがある。また、くだけた場面の会話とした。方言形を含む、日常の話し方で現れる形式の記述を目指した。例文は、以下に挙げた、4場面の8つの文である。

- ・場面1 <昔一緒に海に行ったことを、思い出として話す場面>
 - (1): 小さいとき、一緒に海に行った()。
 - (2): うん、行った()。
 - (3): そのとき(あなた、お前、君、等)、けがをして大変だった()。

- ・場面2 <あるテレビ番組を一緒に見ていた。少し経ってからそのことについて話す場面>
 - (4): さっきのテレビ、面白かった()。
 - (5): うん、面白かった()。

- ・場面3 <小学校の時の担任の名前を質問し、それに対し相手が答える場面>
 - (6): 6年生のときの先生の名前()。
 - (7): うーんと、確か佐藤先生()。

- ・場面4 <昨日、(相手は気づいていなかったが)会話の相手を見かけたことを伝える場面>
(8)：昨日、公園にいた()。車から見えたよ。

いずれも、過去に生じたある事態を述べるという文脈なのだが、それぞれ状況が異なっている。

場面1では、現在から離れた時点での昔の事態について話し合っている。

場面2では、現在から近い時点に経験した事態について話し合っている。

場面3では、過去の事態を忘れてしまい、聞き手に質問をし、聞き手は質問に答える。

場面4では、最近生じた聞き手にまつわる事態について、述べて伝えている。

本章は、全体としては想起という範疇であるが、以下、場面1～4それぞれを分けて、どのような形式が使用されるのか、またそこから考察されることを、述べていくことにする。そして、状況を勘案して、場面1を<遠い過去の事態の表現>、場面2を<近い過去の事態の表現>、場面3を<過去の事態についての質疑>、場面4を<共に認識した過去の事態の伝達>と呼ぶことにする。

面接で、それぞれの文を被調査者に伝え、文末に付加する形式を書く。そして、他にも言い方はないか、と聞いて、出てきた形式を全て書き記していくという方法をとった。そのため、人によっては1つの文に4、5形式を答えた場合もあるし、逆に形式なし、という回答も見られた。答えた形式には様々あるが、全ての形式を考察するわけではなく、ある程度特徴的なものを選び出したりまとめたりしながら、記述していくことにする。

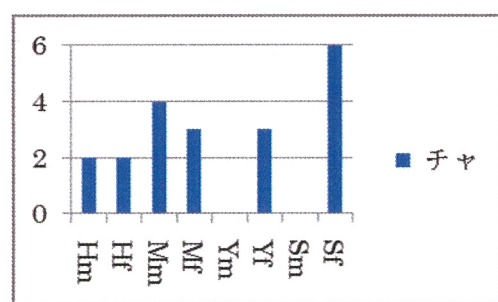
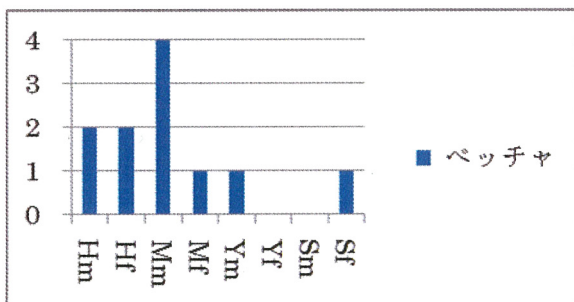
調査対象者は高年層(60代以上)男性12人、高年層女性10人、中年層(4,50代)の男女8人ずつ、若年層(2,30代)男性5人、若年層女性9人、高校生男性9人、高校生女性11人、計72人である。この8つの区別を基にして、以下の節でそれぞれの例文について考察し、述べていく。

2 遠い過去の事態の表現

ここでは、昔の体験を話すという文脈に現れる形式を取り上げていく。上述した場面1の3つの例文であり、その例文(1)～(3)を、その順番に沿ってそれぞれ記していく。

2.1 話題の提示

例文(1)「小さいとき、一緒に海に行った()。」というのは、話し手と聞き手が共に子供の頃という昔(遠い過去)に経験した事態を、話題として文脈の中に提示する文である。その際に付加される形式を、いくつかにまとめた上で、以下に示してみる。



グラフの縦軸は人数を表す。横軸は、Hが高年層、Mが中年層、Yが若年層、Sが高校生、またmが男性、fが女性を表す。例えば、横軸の一番左のHmは、高年層男性を指している。

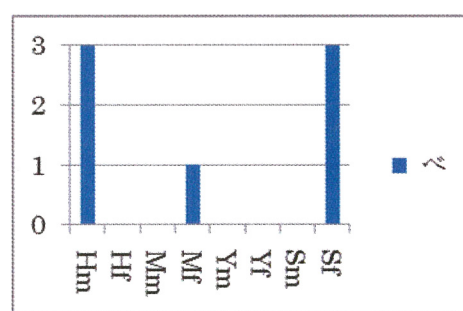
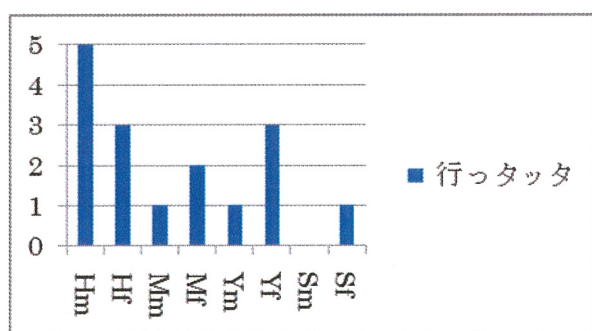
まず、方言形式であるベッチャとチャの回答を示した。これらの中には、ベッチャナや、チャネ、チャナなど、当該形式の後に別の文末詞を付加した例文も含まれている。以下のグラフも同様に当該形式の後に別の形式(主にネ、ナなどの文末詞)を付加した回答も含めた人数で作成している。

ベッチャ形は、推量の意味などを表し、東北方言で広く使用されている形式であるべと、宮城県方言などで使用される方言文末詞であるチャ形とが融合して成立したもので、佐藤(1982:349)には「推量の強意は「ベッチャ」で、つとに“仙台べっちゃ”として有名である。推量形の「べ」に終助詞の「チャ」がついたものである」と記されている。ただし回答数としては、中年層男性でも4人で、他でも1～2人の回答に留まっている。高年層の回答も低く、話題の提示においてベッチャが主な用法として認識されているとは言い難い。武田・半沢(2003)には「言っただろう」のような確認要求方法を担う形式として、特に仙台市の北部の高年層などでベッチャが使用されることが記されている。例文(1)のような話題の提示も、確認要求のニュアンスはあるが、結果としてベッチャは、あまり使用されていない形式である。

一方、同じ例でもチャの方がより用いられている。中年層以上はそれほどベッチャとの差がないのに比べ若年層や高校生ではチャを回答した人数が多い。男性の回答はなかったのに対し女性は若年層で3人、高校生では6人がチャを用いると回答していることが特徴的である。この例のような話題を提示する際に、若い年代では女性がチャを使用しやすい傾向があることが示されている。

宮城県方言のチャについては、仙台市方言を考察した玉懸(2001)に詳しいが、そこで記された用法の中で、話題の提示は「隣接対第1発話相当位置」の用法に当てはまると考えられる(p37)。ただし、その用法は「相手のそもそも知っているはず・わかるはずの事柄X」(p39)というものである。

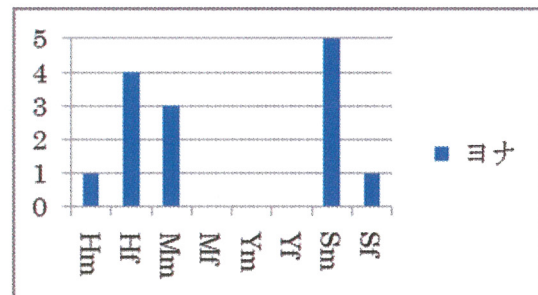
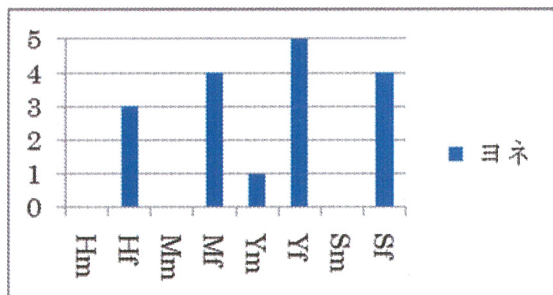
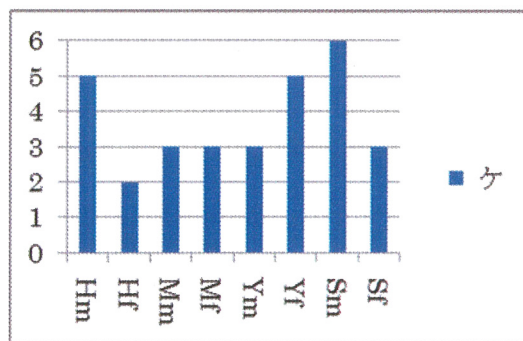
例文(1)は、遠い過去の事態であって、話題を提示した際には、必ずしも覚えていてわかるはず、と想定できるとは限らないと考えられる。そして、この文でチャの使用が女性に多いということは、男性と女性で、過去の事態の認識の想定に差があることの反映だと思われるのである。女性の方が、昔のことであってもずっと認識しているという考えを持っているのではないか。一方、男性は昔の事態など、忘れてしまっていることが多く、会話の相手も発話時点では忘れてしまい、分かるはず、とまでは考えていないのではないか。その男女の想定の違いが、チャの使用割合の差となって表れたのではないかと考えられる。チャの男女差に関しては、更に調査する必要がある。



本節の最初に挙げたベッチャはべとチャの融合形だが、チャがある程度使われているのに比べ、べの方は、回答数が合わせても7人に留まっている。高校生の女性で3人回答があるのは注目されるが、全体としては低調である。べは基本的に話し手の意志と推量の意味を表す文末詞であるため(玉懸 1999)、過去の事実を述べている例文(1)は、推量のニュアンスもいくらかはあるが、べを使用するほど不確定な事態でないために、あまり使用されていないのだと思われる。

もう1つ述べたいのは、行っタッタという形式である。この形式は他のような文末詞ではなく、ここでは‘行く’という動作を表す動詞を時間軸に位置づける、アスペクト・テンスに関する問題となる。東北方言では、一般的にタッタ形が動詞に下接して、過去に生じた事態を一体的に捉える過去完成相として機能することが認められている(吉田 2008a)。本文でも、昔行ったという事実を表す際にタッタ形を用いることが調査で示された。高年層男性の使用が最も多いが、他の年代でも使用するという結果となった。タッタ形は、まだある程度、生産性のある文法形式といえよう。

次に、共通語形で、当地域でも使用されているものを記していく。



例文(1)において最も使用すると答えられた形式は、ケであった。共通語においてもこういった文ではケを使用して、思い出したという意味を表すことが一般的だといえ、当地域でもケと答えた方がどの年代でも多く見られた。ケについては顕著な年代差や性差は見られず、万遍なく使用されており、想起の意味を表す際の、典型的な形式だと考えることができる。

一方、性差がみられたのは、ヨネ・ヨナ形である。これらは、文末詞のヨにネ・ナが付加した形式である。基本的な機能には違いがなく、会話において聞き手に対し共通認識の表出を表す形式だと捉えられるが、共通語ではヨナはヨネと同じ意味で、男性の会話により多く使用される形式だと考えられる(吉田 2008b)。この例も、話し手と聞き手の過去の共通体験を述べる場面なので、共に経験した事態を再認識して述べる、これらの形式を用いやすい場面である。

当地域でもやはりヨネ・ヨナ形の使用が多く、また性差がみられる。ヨネ形は、全ての男性の中で使用すると答えた方は1人しかいなかったが、女性は合わせて16人が使用すると答えており、当地域でも、ヨネ形は女性が用いやすい形式とすることができる。ヨナ形については、男性では合わせて9人が使用すると答えており、女性は5人という結果だった。ヨネほど極端ではないが、ヨナ形は男性の方が使用するという結果が示された。ただし、高年層女性では、ヨネ形3人に対しヨナ形4人であり、どちらの形式も使われている。高年層に関して言えば、ヨネ・ヨナ形は、女性が使用する形式であり、男性はほとんど用いられない形式だといえる。

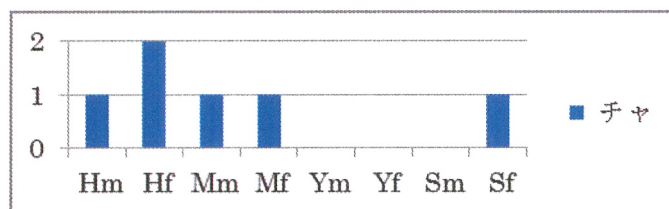
ヨネ・ヨナ形は共通語から広まり、女性の方が早く受容した形式であり、性差については更に後から形成された意識だといえるのではないだろうか。しかし、この点はヨネ・ヨナ形がどのように広まっていったかという全国的な推移を確かめる必要があり、他地域の動向も合わせて、今後の検討課題にしておきたい。

他にも回答のあった形式はあるが、ある程度の数の形式、また方言形式として取り上げたい形式について、回答結果と合わせて考察を行った。

2.2 肯定的応答

例文(2)「うん、行った()。」は、(1)で相手から過去の事態に関する話題を提示され、その発話に対し、自分もその事態を覚えている、認識していることを伝える、肯定的な応答が行われている文である。その時に動詞の‘行った’の後にどんな形式が付加されるのかを見ていく。

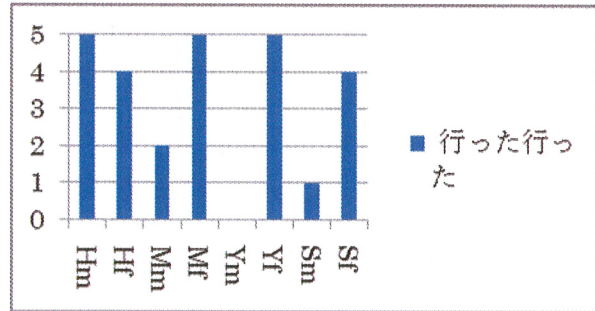
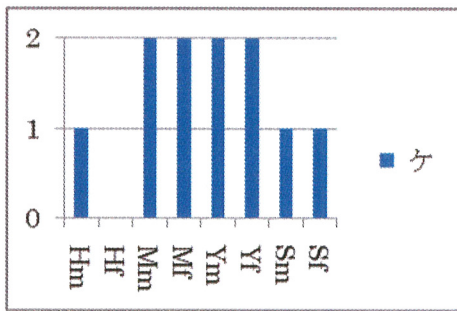
ここでは、行った、という動詞のタ形を示して調査したので、(1)で見られたタッタ形に関しては考察対象から外してある。



例文(1)はいくつか方言形式が現れていたが、(2)ではあまり用いられないという結果であった。

ベッチャと答えたのは高年層女性1人のみで、べも高校生の女性にベヨという形で1人見られたのみとなった。上に示したように、チャは計5人の回答があったが、高年層で3人、中年層で2人、高校生1人と、例文(2)においては、高年層を中心に少ししか使用されていない。

(2)は話題をある程度明確にしっかりと認識した(思い出した)という文脈である。推量の意味の強いべは、(1)よりも相容れないといえる。チャは相手が分かっているながら気づいていない文脈で使用され、また「後続させる発話内容にとっての土台になることとして取り上げる場合」(玉懸 2001:41)も使用されるということである。しかし、この文脈では、話を展開させるのは、話題を振ってきた相手の方であり、(2)の話し手は受け身の立場である。発話を後続させようという意識は低いので、チャの機能とはそぐわず、使用率も低い結果になったといえる。



例文(1)では使用する人の多かったケだが、(2)では全て合わせても11人に留まり、応答ではあまり用いられていない。ケ形は、基本的には明確な認識は表せず、質問文としても使用されることの多い形式である。(2)は、自分が認識していることを相手に伝えることが主な機能である。(1)の文脈だと、質問文として述べても話題を振ることはできるので、ケを使いやすいが、より確実な認識として相手に伝え、肯定するニュアンスを表す文脈である例文(2)でケは使いにくいのである。

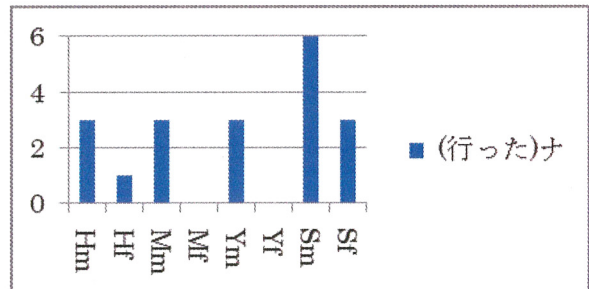
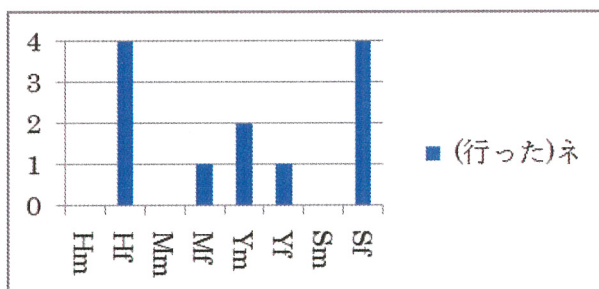
ケ形に代わって、一番使用するという回答が多かったのが、「行った行った」という動詞を重ねた形式であった。どの年代でも5人以上の利用者がみられた。概して女性の使用者が多いが、高年齢層では男性の方が多く、女性的な言い方、とまでは言えない。

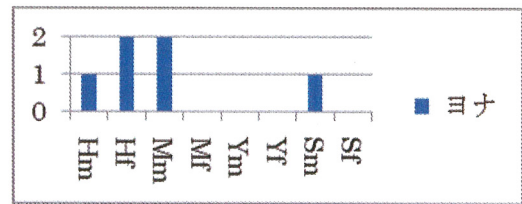
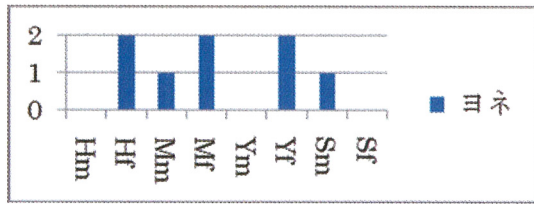
行った行った、のように同じ言葉を繰り返すのは、「反復法」と呼ばれるレトリック表現である。反復法には様々な下位分類があるが、例文(2)では2用法が合わさって使用されているといえる。

1つは、畳語法と呼ばれるもので、ここでは行った、という単語を繰り返し、単語を繰り返すことでその意味を強調する表現法である。(2)は、思い出しという自己内の認識の表出と同時に、聞き手と話し手が同じ体験を共有していることを相手に伝えるという面も存在する。1度言うだけでは自分の思い出の方が表立つが、繰り返すことで聞き手へのアピールも行っているのである。

もう1つは、おうむ返しというもので、この場合は、会話の相手の「行った」という発語をまた繰り返す、という用法である。本調査では、はじめから「行った」という言葉を応答として設定していたので、おうむ返しの用法は定められたものであったが、おうむ返し用法は、聞き手への肯定的な応答の機能を果たすもので、基本的な応答表現だと考えられる。ただし、「行った行った」と2回同じ単語を言うことで、自己の認識＝聞き手の認識、であることを更に強調することになる。

(2)では、チャのように能動的に会話を展開させようとするのではなく、認識の共有を強く相手に示すことで、受動的に後続する会話の場面づくりをする方が文脈として自然である。言葉を繰り返すという強調のレトリックは、そうしたやや複雑なニュアンスを上手く表す方法なのである。





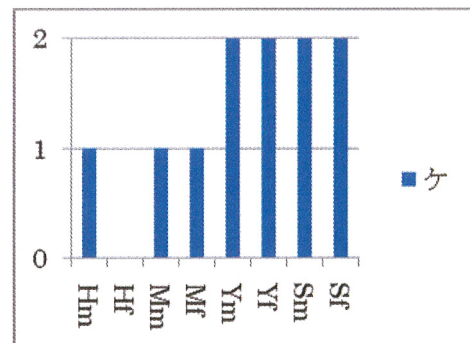
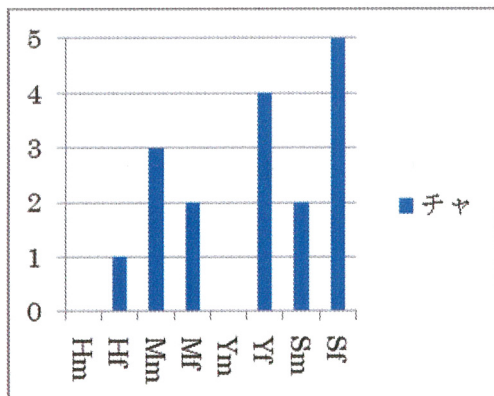
例文(1)では、チャネ、ケナなど他の文末詞にネ、ナが付加した回答が多かったが、(2)は「行った」に直接ネ、ナを付加した回答が目立った。ネは、計12人だったが、ナは計19人で、ナを使用する人数の方が多くなった。特に高校生男性は6人と、最も多くの人が使用すると答えた。

ネは若年層男性2人以外は女性のみ回答だが、ナは男性計15人で、全ての年代で男性の方が多く回答した。総じて、ネは女性が、ナは男性が使用する形式だといえる。男性は「行った行った」と比べると、中・高年層は「行った行った」の使用者の方が多いが、若・高校生層では逆に、ナの使用の方が多くなっている。ナは独言的な場面で使用することが多い形式で、ただ男性的ではなく、自分の認識を自分自身に発することを表し、相手への働きかけが弱い形式でもある。その使用が若い世代の男性で多いのは、その人たちが会話の形成に消極的だということを示しているのではないだろうか。一方女性や高年層ほど、相手へのアピールが強く、共に会話をつくろうという意識が強く、それが使用者の差となって現れたのではないかとと思われるのである。

ヨネ・ヨナは単独のネ・ナより使用者が少ない。この複合形は話し手の認識を聞き手も受け入れると考えていう、「受容要求」(吉田 2008b)を表す機能を持つ。例文(2)は受容する側の文であり、相手へ何か要求する文脈ではないので、複合形の使用はあまり盛んではないのであろう。

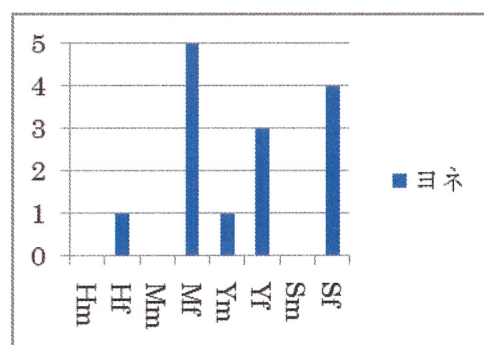
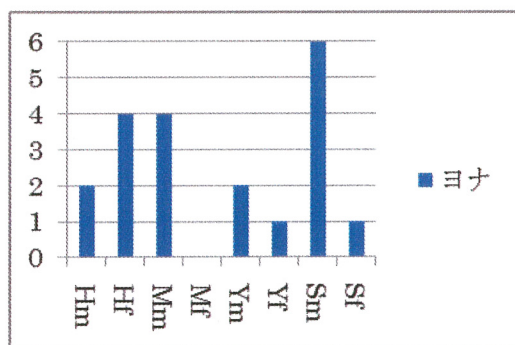
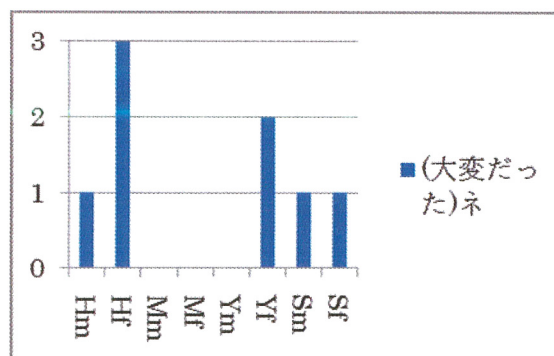
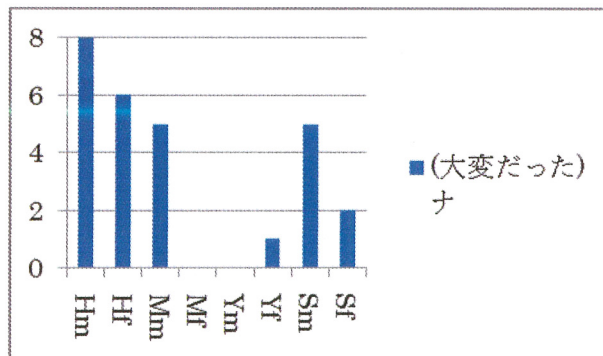
2.3 話題の再提示

例文(2)を聞き、例文(3)は再び相手に「そのとき(相手を指し)、けがをして大変だった()。」と言い、新たな話題を提供している。例文(1)では自分と相手が共に昔経験したことを述べていたが、(3)は相手の経験で、目撃はしても直接自分が体験した事態ではない。話題を提示する点では(1)と似ているが、一定の文脈が形成されつつあり、(1)と(3)の事態の性質も異なる点がある。



例文(3)に関し、方言形式はチャの使用のみが、どの年代にも見られ比較的使用されている。他の形式では、ベが高年層2人と高校生2人の計4人、ベッチャは高年層2人と中年層1人の計3人とほとんど使用されていない。チャは若い世代の使用が高年層と比べても多いことに目を引く。

想起表現の代表形式であるケだが、この例では、各年代でも多くて4人の回答に留まり、使用される形式とは言い難い。例文(3)は、昔のことを話題にしてはいるが、その場で思い出したというよりは会話の中である程度明確な認識を持った上で相手に伝えている。そのため、認識のあいまいさを感じるケは用いにくくなるのである。チャの使用者が多いのも、チャがある程度話し手に明確な認識を持っていることを表す形式だからだと考えられるのである。



例文(3)ではチャを用いるという回答も計17人と多かったが、一番多かったのは「大変だったな」と、タ形に直接ナを付加させた文で計27人となった。例文(2)にもナは見られたが(19人の回答)、(3)の方が回答人数は多くなった。逆に、ネは(3)では計8人に留まり、例文(2)の12人よりも少なくなった。この、ナがネよりも多いという傾向は、複合形ヨネ・ヨナも同様で、ヨナの場合は計20人の回答があったが、ヨネでは14人であった。

男女差だが、ナは男性18人女性9人と男性が多く、ネは女性6人男性2人と専ら女性で占められている。ヨナは男性14人女性6人と男性が多数を占め、ヨネは女性13人男性1人と、ほぼ女性専用形式といえるような結果である。ナは男性が中心で女性も使うが、ネは専ら女性の形式であるという違いがこの文の調査でも示されたといえる。

高年層では、男性はほとんどナしか使用しなく、女性はネも用いるが数としてはナの方が多い。男女ともナ形が一般的でそこに女性ではネも食い込んでいるという状況である。伝統的にはナ形が用いられていて、徐々にネが浸透した、と考えられるのではないだろうか。

また、高年層では単独形(ナ・ネ)の方が用いられているのに比べ、若い世代では複合形(ヨナ・ヨネ)の方が使用されていることが示された。高年層は単独形が計18人に比べ、複合形は計7人と単独形の使用が圧倒的に多い。しかし、若年層では単独形が計3人に比べ、複合形は計7人である。

高校生でも単独形の計9人に比べ、複合形は計11人と複合形の比率の方が高かった。

単独形の方が伝統的には普通に用いられていた形式であり、複合形の方が比較的最近になってから広まったということが、例文(3)の結果から、うかがえるのである。

以上グラフで示したのが、使用者の多い形式であった。他、「大変だったモン(ナ・ネ)」という、モノの文末詞的なモンという形式が高年層で2人、中年層で1人だけ見られた。また、「大変だったンダカラ」という、「だから」で文を終わらせるという人が、若年層と高校生で1人ずついた。

これらは形式名詞や接続詞が文末詞化した使用法である。モンの場合、例文(3)のような相手のことを指すのではなく、自分自身が大変だったことを相手に強く伝えるという場合に使うという用法も一般的である。高年層だけに見られたのは、若い世代では相手に関する事態よりは自分に関する事態にモノを用いることが多いからではないだろうか。また「だから」では、相手が忘れていた事態を思い出させるような、やや押しつけるようなニュアンスがあると思われる。それを若い人で使われたのは接続詞の文末詞的用法の広まりなのかもしれないが、用いている人は少数であり、この例など、相手の経験を話題として提示する際の、一般的な形式とはいえないのが現状である。

以上、発話時点から離れた過去の事態を述べるという文脈で、文末に使用される形式に関して、グラフを用いながら調査結果を示し、合わせて考察を行った。

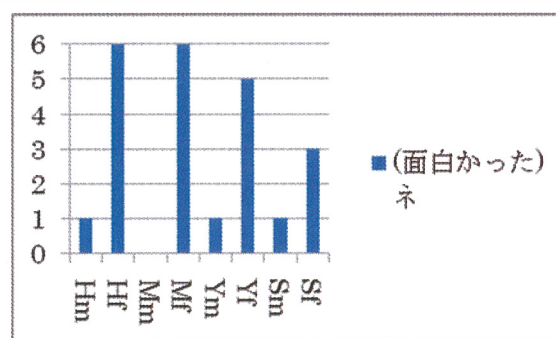
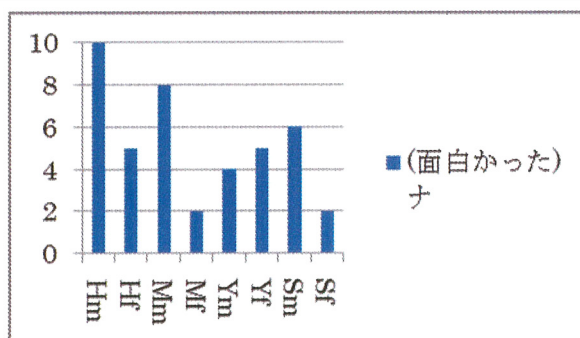
3 近い過去の事態の表現

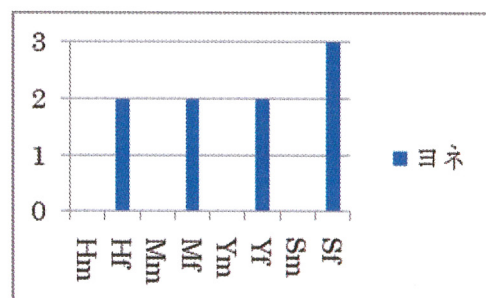
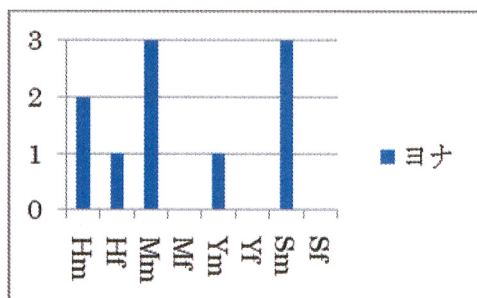
ここでは、発話時点から近い過去に生じた事態を話す際の、文末に見られる形式について述べていく。調査では、例文(4)と(5)の結果である。テレビ番組を一緒に見ている、少し経ってからそのテレビ番組について話すという設定である。

3.1 自分の事態認識の伝達

例文(4)は「さっきのテレビ、面白かった()。」と、テレビ番組を一緒に見た相手にその共有した事態に関して自分が「面白かった」という認識を持ったことを伝達している文である。例文(1)～(3)は昔経験した事態の話だったが、(4)は発話時から離れていない、最近生じた事態に関しての話し手の思いを話している。本調査では、例文(5)で「うん」と聞き手が言うという設定をした。それで聞き手も自分と同じように、面白く思った、という文脈につながっていく。

ここではまず、使用者の多かった形式から記していくことにする。

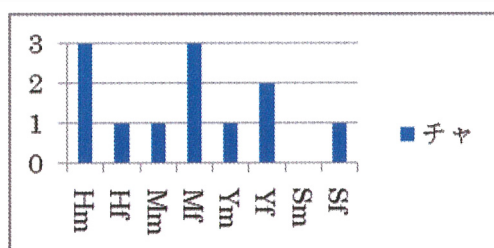




例文(4)では、ナ・ネを付加した文を発話するという回答が圧倒的に多く、使用される形式のバリエーションはあまり多くない。中でも、ナは合計42人を占め、ネの23人を大きく上回っていた。だが、複合形ヨナ・ヨネと比べるとヨナが計10人、ヨネは計9人で、単独形ナ・ネの回答数の方が圧倒的に多いという結果になった。前節でも述べたが、ヨネ・ヨナ形は、話し手と聞き手が共通の認識を持っていると話し手が想定する状況で使用される形式である。(4)でも、テレビ番組を聞き手も自分と同じく面白いと感じた、と想定することは可能なので、複合形も使われる。

しかし、聞き手も自分と同じ認識を持ったかどうか、聞き手の表情が笑っていたなど、はっきりした状況がなければ普通よく分からない。それよりも「面白かった」という自分の感想をそのまま伝え、その感想について聞き手に同意を求める方が自然で話しやすい。共通語の考察だがネ・ナには、「同意要求 聞き手の意向との一致を問う」(野田 2002:280)という用法が存在する。この例文も同意を求める言い方をすることを自然と感じ、結果としてナ・ネを使用するのが典型的だという結果になったのである。男性ではネの使用がほとんど見られず、ナを使う傾向が強い。女性はネの使用者も多いが、若年層女性ではナとネがどちらも5人、高校生女性もナ2人、ネ3人など、若い世代の女性でも、同意要求でナが使用されているという現状が見られた。

複合形では女性はヨネを使用する人の方がどの年代でも多い。複合形は、やはり新たに浸透した共通語的形式で、浸透する段階で男性的なヨナはあまり受け入れられず、ヨネの方が当地域でも受け入れられたのではないかと思われるのである。



例文(4)では、他にまとまった使用が見られたのは、チャのみであった。このチャは、チャの持つ機能から、複合形の場合と同じ共通認識を持っているという想定で発話されると思われる。しかし計12人であり、やはりナ・ネなどの方が一般的に用いられる形式だといえよう。

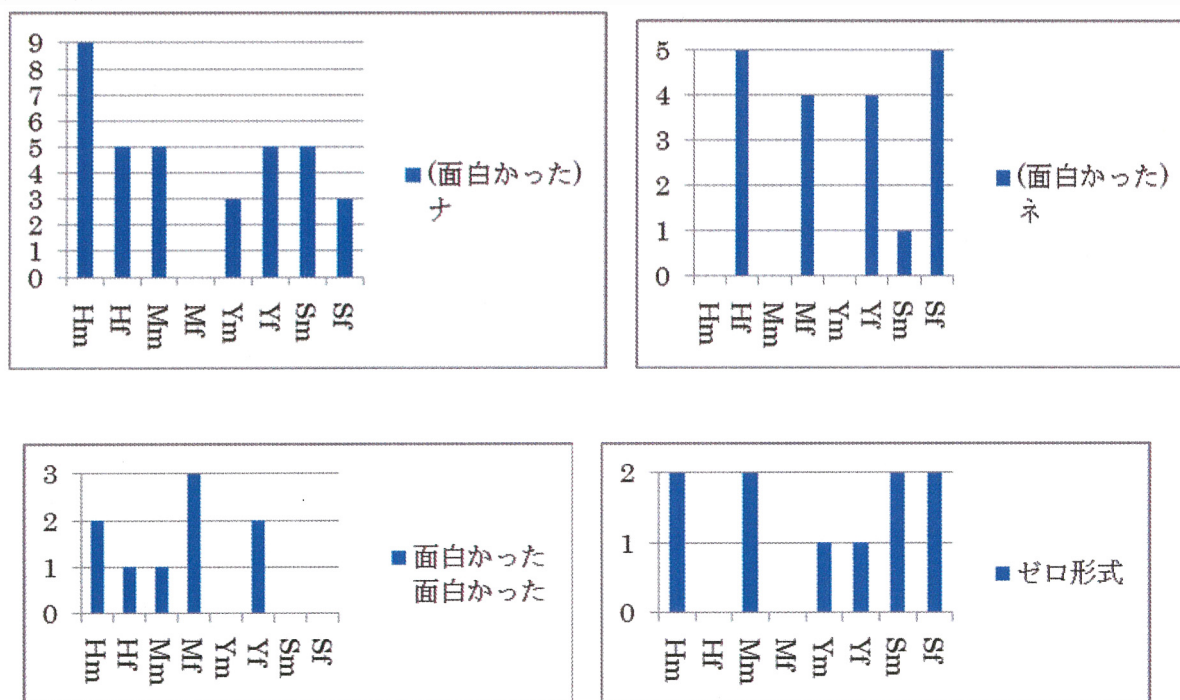
他にはべが高年層男性で2人、ベッチャが高年層と中年層1人ずつ計2人で、これらの形式はほぼ用いられていないと言い得る状況であった。数は少なかったが注目したいのは、「面白かったし」という回答である。これは、高校生で計3人(男性1人、女性2人)であり、非常に少ないのだが、高校生だけの回答だったということが興味深い。この「し」というのは、接続表現「(～だ)し」が

文末詞的に使用された用法である。この文末に「し」を使うのは、若者語として取り上げられることのある用法だと考えられ、それが、気仙沼でも同じく若者から浸透しつつあるのではないかと考えられる。ただ、若年層には使用が見られなかったことから、学校を中心に広まっているのではないだろうか。今後この「し」が上の年代にも広まるのか、注目すべき現象である。

例文(4)では、ケ形を回答した人はゼロであった。時間が離れていないため、思い出すという過程は必要ないことから、ケは用いられないのである。

3.2 相手の認識への同意

会話の相手から例文(4)の「テレビ番組が面白かった」という認識を聞き、それに対して自分も同じように感じたことを伝えるのが、例文(5)「うん、面白かった()。」という文である。相手の認識に対し、自分も同意している、同じように「面白かった」と感じたことを伝える文である。例文(5)も(4)同様、形式のバリエーションがあまりなかった。まず、代表例をまとめて記してみる。



例文(5)で最も多い回答は、「面白かったナ」であり、合計 35 人であった。高年層男性の 9 人が最も多かったが、若年層、高校生に至るまで安定した回答数が見られた。また、中年層女性の回答はゼロだったが、それ以外の年代は女性でもナを回答した人が存在した。一方「ネ」は計 19 人であり 2 番目に回答の多い形式だったが、使用者が女性に偏り男性は高校生 1 人の回答しかなかった。

この文で使用されるネ・ナの用法は「同意表明 聞き手の意向との一致を示す」(野田 2002:280)という同意表明用法であり、当方言でも例文(5)のように相手に同意を伝える際には、ナ・ネが最も使用される形式なのである。そして、全体ではナの方が使用される形式であり、男性ではほぼナに限られていることも、(4)と同様に(5)の結果からも示された。女性は、ネをより好むが、ナも根強く残っており、女性では、ナとネを共に使用するというのが現在の状況といえよう。

例文(2)では、肯定的な応答として「うん、行った行った」という、動詞(述語)を重ねる言い方が最も多かった。例文(5)にも「面白かった面白かった」という回答はあったが、合計で9人に留まり一般的な表現とはいえない結果である(この数字は、オモシエガッタ形も含めている)。(5)と(2)の大きな違いは、事態を思い出すという過程が存在しないことである。そして、2人が共にテレビを見る、という共通体験をしたことも、発話時点では明確に意識されている。そのため聞き手に共通体験をしたことをアピールする必要はない。「面白かった」という自分の認識を素直に伝えるだけで十分に同意表明としての役割を果たせると思われるので、反復法により強調して述べる必要を、(2)よりは感じず、結果として(5)では反復表現はあまり用いられていないのである。

(5)では、文末に何も付けないという、ゼロ形式の回答「うん、面白かった。」数が、合計10人と3番目に多い結果になった。他の例文でも1、2人はゼロ回答があるが、これだけまとまった数はこの文だけである。話し手自身のテレビを面白く見たという認識は、聞き手の方が「面白かった」と言っているのだから、特に強く聞き手に伝える必要はない。「面白かった」と、ただ伝えたい内容を表す単語だけ述べれば、事足りると考えるのも自然である。それで、文末詞も付加させない、動詞形で終了させた文の使用にも、一定の広がりがあったといえる。

その他の形式は、少数の回答しか得られなかった。ヨナ形が合計で6人、ヨネ形が合計で4人である。ヨナ形は男性5人女性1人、ヨネ形は全て女性という点で、この複合形もナとネの男女差は見られる。この複合形は、相手に対し「共通認識の表出・受容要求」(吉田 2008b)の意味を表すのが基本である。しかし例文(5)は、相手が自分と同じ認識を持つことを分かっている状況の発話なので、複合形を使用する必要のない文である。そのため、少ない回答となったのである。

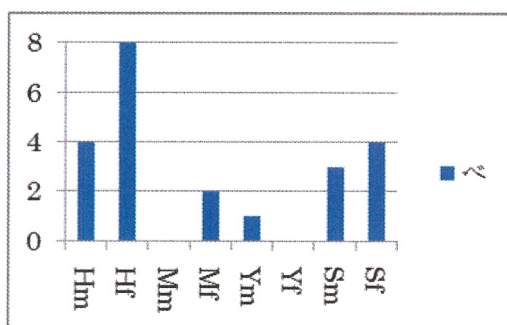
例文(5)で方言形式の使用は、チャ形が合計3人(高年層2人、中年層1人)だけで、ほとんど見られなかった。ナ・ネといった単純な文末詞の付加が一般的という結果となった。

4 過去の事態に関する質疑

この節は、過去の事態に関する質問をし、それに対して答える、質問と応答の場面である。小学校の時の担任の名前という、発話時ではすぐに認識しにくい過去の事態を設定した。

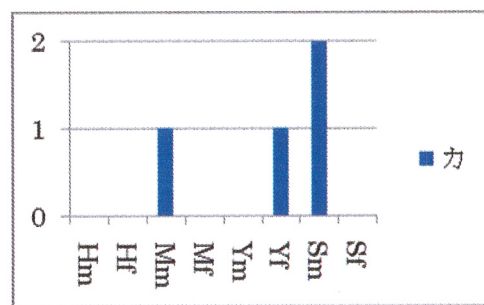
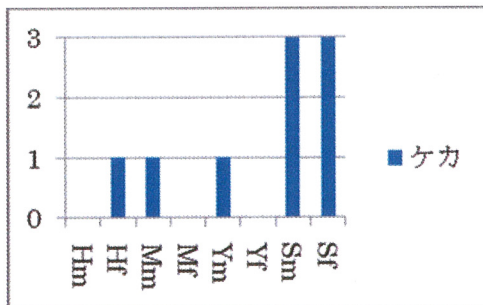
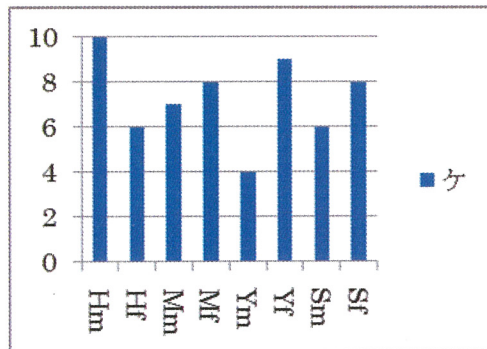
4.1 過去の事態の質問

例文(6)は「6年生のときの先生の名前()。」というものである。まず、べの結果を記す。



例文(6)では「6年生のときの先生の名前」の後に「誰だ(誰だった)、何だ(何だった)」という語句が来ると設定し、その後に付加される形式に関して、考察をする。‘べ’であれば「誰だべ、何だったべ」という文になるが、「誰だ、何だった」の部分は考察対象としていない。

(6)で使用される方言形はべのみだったが、合計22人の回答があり、ある程度使用される形式だということができる。べは話し手の推量を表すので質問文で使用されるのは当然とも思われるが、(6)では‘誰’なのかについての想定が何もなく不定である。そのため「佐藤さんだべ」のように何らかの想定を表す質問文に比べるとやや使用しにくく、そのため22人の回答に留まった、と考えることも可能である。ただし、若い世代でもべが使用されていることは示された。



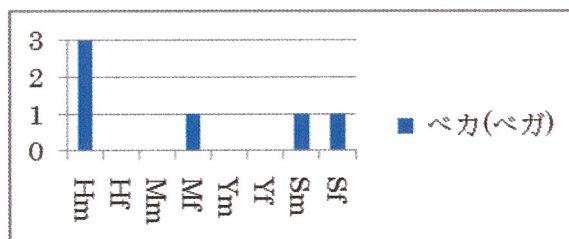
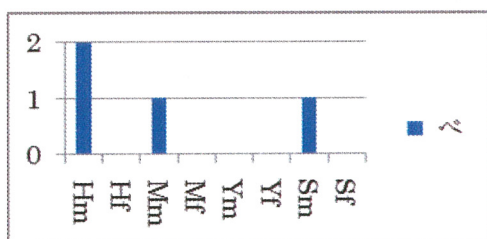
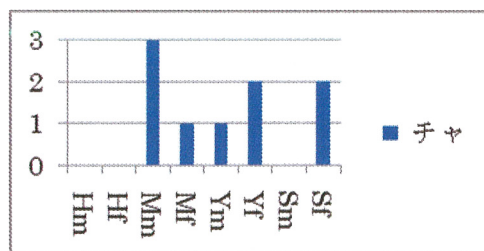
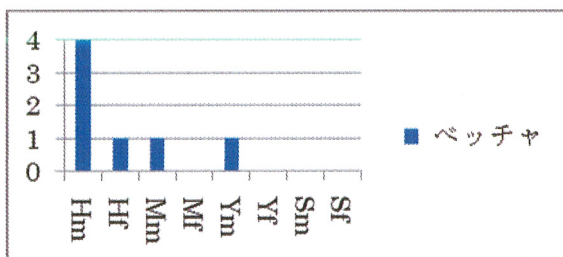
例文(6)では、べの他には、上に挙げたケ形に回答が集中していた(ケネ、ケナ等も含む)。ケカも当然ケ形の中に含まれるが、カ形単独の答えも少数だがあったことから、比較のためケ形と分けてケカの数もグラフにした。いずれにせよ、ほとんどの層でケの回答が最も多く、(6)のような過去の事態について質問する際は、思い出しを表すケ形を用いていることになる。思い出そうとしている内容が不定の際にもケは用いられ、共通語でも(6)ではケが代表的な形式だと考えられる。

疑問を表すカの使用も見られるが、数は少ない。ケカという形式も存在するが、ケ単独で十分に質問のニュアンスがあるために、カを付加する必然性はないと思われる。しかし、高校生のケカ・カの回答が、他の世代より多いという結果があった。ケカの使用実態などは、あらためて調べていく必要があるかと思うが、全体で見れば質問文であっても、圧倒的にケ単独で表現することが、現在の当地域では一般的であることが、調査から示されたといえよう。

なお、イネという回答が高齢層に、イナが中年層で各1人ずつ見られた。「誰だい」という質問文にネ・ナが付加した形式と思われるが、ほとんど使用がないとみなしてよく、少なくとも過去に関する質問文では、ほぼケ形のみが使われているというのが現在の状況である。

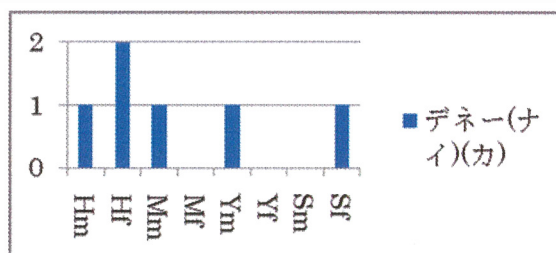
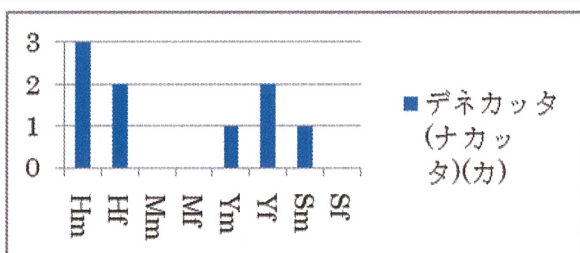
4.2 過去の事態についての応答

例文(6)の質問文に対する応答として、例文(7)では「うーんと、確か佐藤先生()。」という回答を設定した。この例文(7)の最後にくる形式を、本調査で記述していった。しかし、(7)では、(6)と違い、複数の回答があり、抜きん出て多くの方が答えた回答というものがあった。そこで、回答数が比較的多かったもの、また方言形など、重要だと思われるものについて、以下述べていき考察を行うことにする。なお(7)も、(6)同様「だ、だった」の部分は直接の考察対象とはしない。



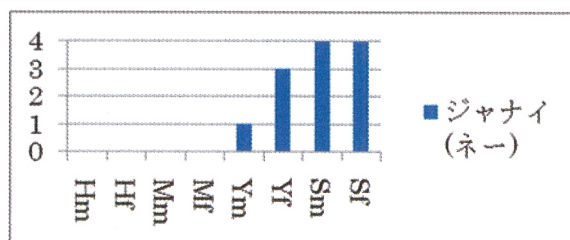
例文(1)「小さいとき、一緒に海に行った」という遠い過去の事態を述べるときに使用されていたベッチャ形が、ここでも見られた。例文(1)では計11人だが、例文(7)は計7人と(7)の方が少なくまた中・高年層に偏っている。(1)に比べても、更に確認要求のニュアンスが低い、質問への回答という場面なので、ベッチャの使用があまりないと考えられる。また、ベッチャの使用が多い高年層男性はそれほど要求の度合いを感じずに使用しているのかもしれないが、更に調べる必要がある。

中年層以下では、チャがある程度使用される。相手は「佐藤先生」ということは、忘れていただけで実は知っているはずなので、チャは使用可能である。また、べ・ベカという回答も見られた。べは推量を表すので、答えに対し自分でもあまり自信がないと考えれば、べを用い相手に問い返す文を発話することも可能であろう。質問文であるため、べ単独の回答と共に、カを付加したベカという回答も、べと同じくらいに見られるのだと思われる。

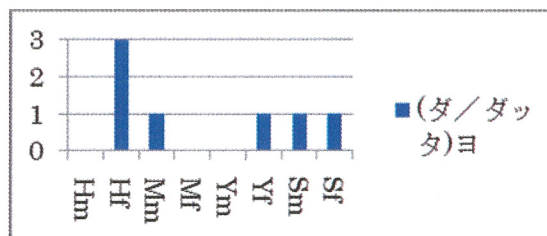
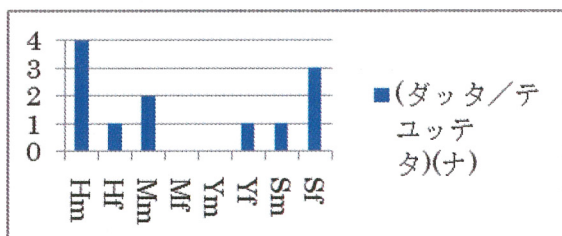
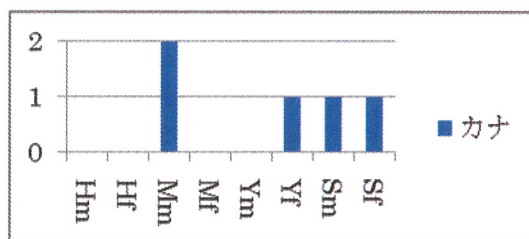
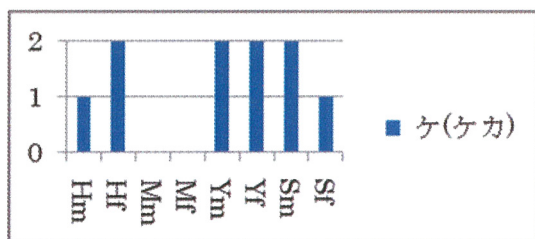


上のグラフは、「佐藤先生デネカッタ。／デネー。」など、それで文を終止させた回答の数を挙げたものである。これらは、「デ+ネカッタ、ネー(カ)」などという、デに否定形(ナイ・ネー)が続く

疑問形式である。共通語では‘デハナイカ’と‘デハ’に否定形が付加するが、その‘デハ’が‘デ’となっている。これらデ系の回答は計 15 人となった。



デ系の疑問形式の回答がある一方で、‘ジャナイ(ジャネー)’という、ジャの後に否定形が続く形式の回答が、若年・高校生層で計 12 人見られた。若い世代でも‘デ’系の回答はあるが、結果としては、ジャナイという共通語的な否定疑問文が、若い世代では浸透していて、逆に中年層以上では浸透していないということである。当方言では、元々否定疑問文は‘デ’に否定形を付加する形式が一般的で、現在はデ系と若い世代はジャ系が共に使われているという状況である。



その他、比較的応答数の多い形式として、ケが計 10 人見られた。過去の事態を思い出したとき、また自信がなく問い返す場合でもケは使用できるので、ある程度の数があるといえる。

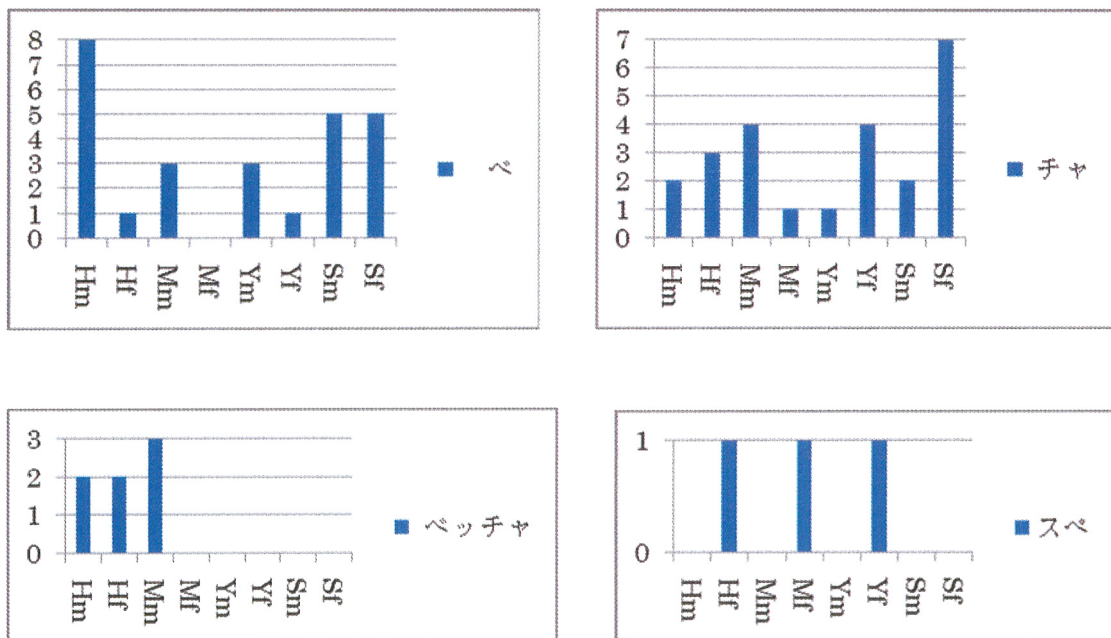
「ダッタ(テユッタ)ナ」という回答は計 12 人あったが、「ダッタ(テユッタ)ネ」と回答した人はいなかった。女性でもネの使用が見られないのは、この文の事態認識に話し手があまり自信をもっていなく、聞き手にはっきり伝えるよりは、独り言のようにあいまいに伝える方が自然だと判断する被調査者が多かったためだと考えられる。なお、「ダ(ッタ)ヨ」という回答も見られたが、高年層女性の使用が多く、他の層は 1 人だけだった。高年層の男性がベッチャを比較的使用するのと同様で、高年層では質問に対して強いニュアンスを持って答えることにあまり抵抗感がないのではないかと。こういった年代による応答の仕方の違いは、別に調べていきたい。

ヨネ・ヨナの複合文末詞形式は、ヨネ・ヨナ共に 5 人ずつで、あまり使用されなかった。この文は話し手自身の認識がはっきりしないと考えるのが自然であり、複合形の持つ受容要求というニュアンスは強すぎてそぐわないと判断されて、使用が少ないのだと考えられる。

その他、「と思う(思った)」の回答者が計5人、「ような気が(する)」の回答者が計4人、それぞれいた。こういった、分析的な語彙形式が回答されたことも、この例文(7)のような、比較的昔の事態について質問を受けた際は、代表的な使用形式がなく、それぞれの人の感じ方により様々な形式の使用が可能であることが示されたといえる。これは、例文(6)の質問文では、ケやベに使用が集中したのとは違う傾向である。また、文末詞の問題だけでなく、否定疑問形式の問題も絡んでいる。例文(7)は、その中にいくつかテーマがあり、課題となることも多い文である。

5 共に認識した過去の事態の伝達

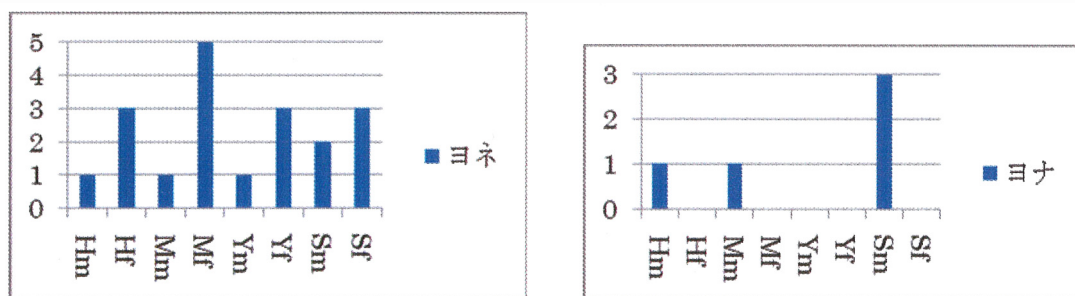
想起表現に関する本調査の最後の文として、例文(8)「昨日、公園にいた()。車から見えたよ。」を設定した。この文は、相手は気づかなかったが話し手が昨日、会話の相手を公園で見かけたことをその相手に伝えるという状況で発せられた文である。昨日のことなので、自分も相手もその事態は、はっきりと覚えていることが想定される場面である。



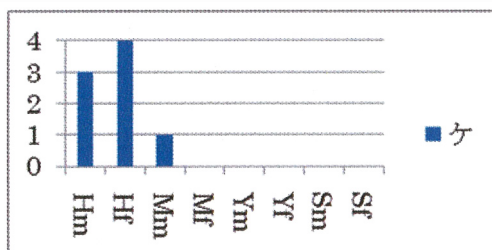
例文(8)では、方言形であるべの回答が計26人、チャの回答が計24人と、比較的多くの数が得られ、これらの方言形式を使用しやすい文脈であることが分かる。高校生でも使用されており、べやチャが根強く使われていることが示された。上に述べたように、「昨日公園にいた」という事態は、聞き手が当然知っているので、相手の知っているはずの事態を取り上げる際に使用されるチャを付加するのは、自然だといえる。また、べについて、確認の意味があることが玉懸(1999)で述べられている。その確認は、ある事態が現実であるかを聞き手に確認する、という特徴があるとされる。その例には「アッコサ郵便ポストが見エッべ。」(玉懸 1999:45)という文もあり、話し手は現実のことと認識しているが、聞き手もそう認識することを確認する際に、べが使用されることが分かる。例文(8)は典型的な確認要求の文脈と捉えられるので、チャとべがほぼ同じ機能を持つ形式と見なされ、結果的にどちらの形式も同じ程度使用されているのであろう。

ベッチャも見られたが、年代の高い層に限られている。ベッチャの機能としては用いやすい文脈だと考えられるが、あまり回答されていない。やはり、ベッチャは若い世代ではほぼ使用されない形式となっていると思われる。当地域では、元々確認要求の意味は、ベ形が担っていて、ベッチャはそれほど浸透していなかったのかもしれない。べ、チャ、ベッチャの古い世代の使用状況やその地域分布は、まだ考察すべき点が多いといえるが「確認要求の意味は本来べが担っていたものであり、チャは別の意味を持っていたもののように思える」(武田・半沢 2003: 121)という指摘は当地域の動向と通じている。ただし高年層男性は圧倒的にべの使用が多いが、高年層女性はべよりチャの回答数の方が多い。高年層でも女性には比較的チャが早く浸透していたのではないだろうか。

また、スペという形式が、数は少ないが若・中・高年層の女性に1人ずつ見られた。丁寧さを表現する‘ス’にべ(ベ)が付加した形式だと思われるが、男性の使用はなく、女性の方が丁寧に表現する傾向が強く、この形式が出てきたのであろう。しかし各年代1人ずつしか見られず、女性を中心に、細々と命脈を保っている、衰退した形式だと位置づけられよう。



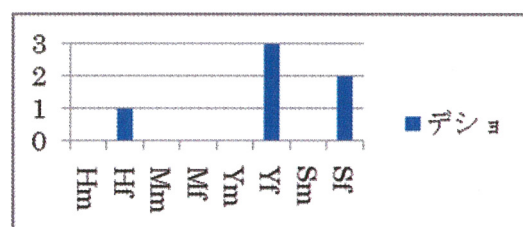
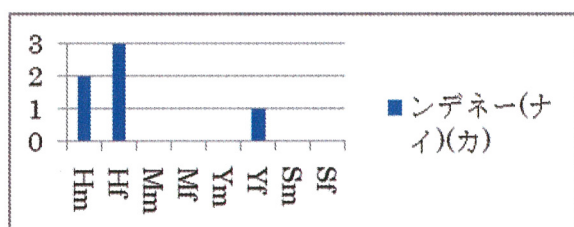
複合形式ヨネ・ヨナも見られた。ヨネは合計19人である程度数があるのに比べ、ヨナは計5人と少なく、例文(8)に関してはヨネの方が使用しやすい形式である。ただしヨネは女性の回答が14人と女性が主に用い、ヨナは全て男性の回答となっており、ここでもヨネは女性、ヨナは男性中心という違いが示されている。遠い昔の事態を述べた例文(3)「そのとき、けがをして大変だった()。」でも複合形は使われていたが、(3)はヨナの使用者が多く、(8)とは逆の結果である。例文(3)は思い出して自分自身で確認するという側面があるため、独り言でも使いやすいヨナが選ばれている。それに対し例文(8)は自分自身の認識は明確で、相手に対する確認という側面が前面に出るため、独り言的なニュアンスのあるヨナより、聞き手に伝えていることを明確に示すヨネが選択されている。男性は伝統的なべなどを好み、結果としてヨナの数が少なくなってしまったと思われる。



この文でもケは使用されているのだが、中・高年層に回答が集中する結果となった。(8)は質問文として発話することは考えられにくく、このケは平叙文での用法として用いられたケだと捉えられる。ケに平叙文の用法があることは、東北方言では一般的である。そして、昨日のことであるから

昔のことを思い出すわけではなく、自分の認識を確実なものとして相手に伝達するという文脈で、ケが使用されるのである。このケは、自分が見たことを伝えるのがメインであるが、その裏に、相手が公園にいたことを確認するという意図もある。東北方言のケの用法は、吉田(2004)に観察、経験、想起要求という主な3用法があると述べられている。例文(8)のケは、基本的には観察用法であるが、その中に想起要求の意味合いも混じった用法だと位置づけられると考える。いずれにしても、平叙文として認識を伝える文であり、共通語的なケの用法とは異なる使用法だといえる。

ケが年代の高い層に集中しているということは、若い世代になるほど、平叙文的用法が衰退し、他の例文でみたように、質問文的な用法としてケを用いるという、ケ形の共通語化が浸透しつつあることの結果だと考えられるのである。共通語にはない用法は排除されているわけで、方言形であるベヤチャが若い世代でも使用されているのとは対照的である。ケ形自体が、伝統的方言形ではなく、若い世代では共通語形として認知される傾向が強いのではないかと考えられるのである。



数は少なかったが、「デネー(ナイ)(カ)」と「デショ」という回答があった。デネー等は、4.2節でも述べたが、否定疑問形の形式であるが、「デ」の後に否定形(ネー、ナイ)が続く伝統的な形式である。例文(8)でも高年層に回答が集まっている。それに対し、デショは推量の丁寧形「でしょう」の変化形で、(会話的な)共通語形である。このデショは、全て女性の回答で、しかも若い世代の回答が多い。ここでも、伝統的な形式から共通語形への移行がみられるのである。

例文(8)では、ベヤチャという方言形の使用が多く確認されたが、その一方ケ形などでの方言的用法の衰退現象も見られた。また、女性の方が丁寧形を使用するという傾向も見られた。

6 まとめ

本章で述べてきた調査は、想起表現という過去の事態に関して述べた文に関する文末表現を対象にしたものである。ただし、思い出すという過程を伴う典型的な想起表現以外にも、昨日のことなどあまり時間が経っていない事態を述べる文も合わせて調査し、広い意味での過去の事態の表現に関して、例文(1)～(8)まで、それぞれの調査結果を示し、考察を行ってきた。

現在から離れた事態を表現する際、また過去の事態についての質問文では、共通語と同様に、当方言でもケ形が全体的に用いられている。時間を経ている、明確な認識を持って事態を述べる際は、ネ・ナ、ヨネ・ヨナといった形式が使用されている。これらの形式は、基本的に話し手の持つ事態認識を、聞き手も同様に持っているとして想定して使われている。その中でも、ネは女性の使用が多く、男性はナを用いることが多いという性差が確認された。また、ヨネ・ヨナという複合形式の方が比較的新しく浸透したといえ、特にヨネは女性の受容が著しい形式である。